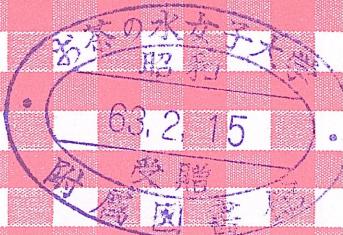


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1987 8

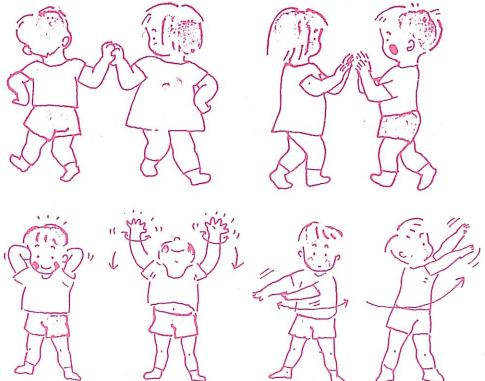




# 幼児のリズムダンス

中沢善宏

編著・B5判・88頁・定価一、二〇〇円



子どもたちが夢中になつて楽しめるリズムダンス集です。

サンバ、チャチャチャ、ポルカ、はては盆踊りまで多彩なリズム表現が楽しめます。

踊り方をイラストにしたので、指導も簡単です。

本書に収録した作品の大部分がレコード化されているので、それを併用すれば、よりリズミカルな表現が樂しめます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館

# 幼児の教育



第八十六巻

第八号

# 幼児の教育 目 次

— 第八十六卷 八月号 —

ひとりひとりの子どもと「いま」を生きる…………津守 真… (4)

SF的読み解き 子どもという風景

第二十八回 なぶることの広がり…………堀内 守… (10)

緑蔭図書紹介

「ねずみ女房」 ………………

森下みさ子… (20)

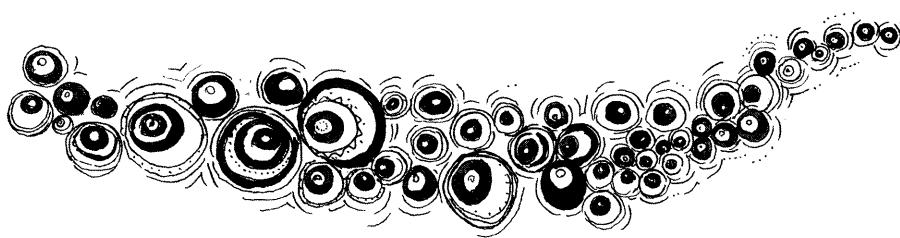
「子どもの本の世界大会」の記録を読む ………………中村 悅子… (25)

「河童が覗いたヨーロッパ」その他 ………………

早川 好江… (30)

© 1987

日本幼稚園協会



「人間のやさしさ強さ」その他 ..... 村石 京子 (35)

「サンペイ・ベルジュンパ・ラギ」 ..... 近藤伊津子 (41)

「グリム童話」と三人のグリム兄弟 ..... 美谷島いく子 (45)

シンガポールを訪れて ..... 小澤 誉子 (54)

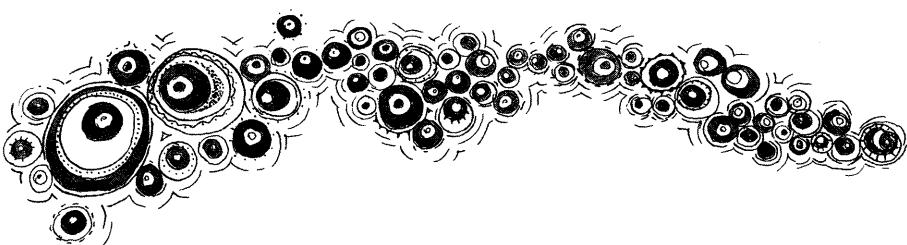
若いお母さんたちへ ..... おしゃべりに耳をかたむけて (56)

はるにれの会 宮里 晓美 (56)

カット・福田 理恵

編集部・小澤 誉子

土屋真美子



# ひとりひとりの子どもと「いま」を生きる

津守 真

## 手をひかれる

今年度、幼稚部の担任をしている私は、ひとりの子どもの相手をしていても、他の子どもたちにたえず気を配らねばならぬ立場におかれている。校長として全員に心をかけるのは何週間かの間にすることだが、担任の場合は毎日常時のことである。ひとりの子どもを相手にしていても、他の子どもたちがどうしているかと思うと気が落ち着かなくなる。

ずっと前から私を頼りにして毎日を過しているK男は、私のこのような気持の変化を敏感に察知していたようである。ことばをはなさないこの子どもは、要求があるときには大きな声を上げて歩きまわるのだが、四月にはそれが多くなっていた。同じあそびをしても、この子どもの動作に微妙な変化がある。滑り台の上のバルコニーで私と目を合わせ

て、見えかくれする遊びが好きで、そのときに私の頭を柱の鉄棒の定位に固定させてからこの遊びをはじめる。私がどこかにいつてしまわないようにということのようである。

他の子どもが一緒にいる空間では、私は複数の子どもと共に楽しみたいと思うから、床の上をころがったりふざけたりすると、他の子どもたちは喜んでも、この子どもは立ち上つて身体を戸口の方に向け、手を後に差しのべて私の手をひく。私がすぐに応じないと次第に大きな声を上げる。私が複数の子どもたちの中でたのしみたいと思うそのことが、K男にとつて好ましくなかつたことがわかる。この子どもは私との間に閉じた空間をつくつておきたいらしい。

そんなとき、たまたま通りかかったひとりの先生が、正面からK男の顔をみて、ウワーーと声を出してふざけた。K男は大口を開けて笑い、この数週間にたえず一緒にいた私には見せなかつたうれしそうな表情を示した。ときどき私の方を振り返りながら、その先生との間で数分間やりとりをつづけた。

私は、日頃、学校を、どの子どももそれぞれがあるまで生活できる場としたいと考えている。だが、こうして私が折があれば他の子どもたちに目を向けようとしてその子とつきあつているときには、その子が他の子どもと一緒に遊べるように変化しなければ生活していく状況をつくつているのではないか。そう思つていると、私もその子と一緒にいることに疲れてしまう。それではこの子どもにとつてここは居心地のわるい場所であろう。

K男は私との間で閉じた空間をつくりたい。それならば、私もその中で積極的にたのし

み、その空間に生命を注ぎ、そのときの「いま」を自分が生きる場所とすることが求められているのではないか。

### 自我的支えとなる

このことの一週間前、K男は私と机の上で粘土をしていた。K男はへらで粘土にすじをつけたり切ったりするのが好きなのだが、私の手にへらを持たせ、自分の手でする代りに私にやらせていた。もうひとり別の子どもがきて、同じ机の上で粘土をいじりはじめ、しばらく三人でやっていた。突然、その子がK男の手にしていたへらを取り、顔を叩いた。K男は声を上げ、部屋の真中に向ってふらふらと歩いていった。

こういうとき、この子どもは、手に持っていた物をとり返すことをせず、おとなに助けも求めず、声を上げて彷徨する。抵抗するほどの自我の強さがなく、あてどなく歩き回りながら発する声は、虚空にこだまする響きのように感じられる。私は急いでK男のあとを追い、手を差しのべる。叩かれて自分を喪失したように感じても、支える人はいるのだよとわかつてもらいたいと思い、私はK男と手をつないで歩きまわる。

間もなくK男はいつものよう私と自転車にのり、背中にもたれかかった。こういうときは殊更に重く私に寄りかかる。

K男の自我は、とくべつに弱く、信頼する大人に支えられてようやく保たれていることが分かるので、K男が私を求めるときには、私もしつかりと應答することがこの子にとって

ては必要なのである。そういう思いと、他の子どもたちへの心づかいで、私の気持が引き裂かれる。

### いまを生きる

それが必要だという理由でつき合っているときには、私もその子と過すそのときを心からたのしめていない。たとえ時間は短かくとも、共にいるその時をゆっくりとたのしんで過すときにはじめて子どもと心を通わせ合うことができるのだろう。

このように反省した私は、次の日、とくに自覚してK男と共に過す「いま」を充実して生きることを心がけた。滑り台の上で目を合わせる遊びをするときにも、そのときを活気をもって、楽しむようにした。他の子どもたちのことを見ていないというわけではない。私が眼前につき合っているその時を、ひとつずつ、十分に生きるのである。そうすると、子どもはそのひとときの中で、その大人からしつかりとみてもらっていることを確認できるのであろう。K男はその日から面白そうにし、バルコニーで私といつもの遊びをしている間にも、窓ごしに室内の大人を見て声をかけ、笑いかけたりすらした。私については安心して他のことへと関心を向けたのだと思う。そのうちに室内に入つてゆき、しばらく私のところにもどつてこなかった。先学期以来久しくなかつたことであった。この日、思ひがけず、私はほかの子どもともゆっくりとつき合う時が与えられた。たつたこれだけの自分の覚悟が、子どもにはこんなにも大きなことだったとあらためて思はされた。

まだ起つていの何かを予想して自己防衛しているときには、人はいまを十分に生きていない。ひとりの子どもとのいまを大切にしていたら、他の子どもたちへの配慮が薄くなるのではないかと心配するのもそのたぐいである。ふと私は幼いころの自分の幼稚園の先生の横顔を思い出す。私が覚えているのは、私の傍に立ちながらいつも遠くを見ていた、私に寂しさを感じさせたその横顔である。こんなことを数十年もたってから書くのは申し訳ないような気がする。だがだれにでも起りうるひとこまである。この先生も、私とつき合ひながら他の子どもたちのことを気にして遠くを見ておられたのかもしれない。

K 男はこの日以来、私と面白く過したあと私からはなれて遊ぶ時間が増し、私は他の子どもと交わることが少しずつ容易になっている。

学年があらたまるごとに、以前と環境がかわらないように見えて、子どもにとつてはクラスや先生の様子に変化を察知していることが多いと思う。大人の信頼を確認したい子どもをかかえて、複数の子どもを見るのには人手が足りないことを感じさせられることも多い。その中でひとりひとりの子どもと確かな関係をつくるのには、並ならぬエネルギーを要する。だが、瞬時でもひとりの子どもと共にあるその「いま」を自分が本当に生きていたから、子どもたちの生活は充実してこないのでなかろうか。

### ある訪問

四月の末、かつての学生であつたひとりの若い幼稚園の先生が訪ねてきた。三十五人の

子どものクラスを担当していく、学年はじめには、衣服を着がえさせたり、靴を探したり、いつも二、三人の子どもを脇にかかえ、全員を帰すと体中の力が脱けてしまうとう。それでも先生が緊張にひきつった顔を子どもに向いたら、それだけで子どもはたのしくなるだろうから、ひとりずつの子どもにゆっくりと腰をすえて接するのだという。いまを大切にする若い先生の四月の奮闘ぶりが、私にはよく分った。

(愛育養護学校)



## 第二十八回

# なぶることの広がり

堀内 守

### 摩擦

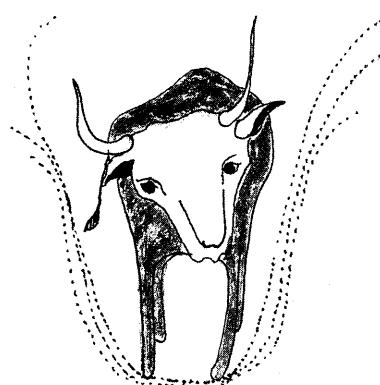
最近では「摩擦」は「経済摩擦」のように抽象的な使われ方をしている。いや、抽象的というよりは具体的といふべきか。このあたり、子どもに戻ってみてとらえ直す必要がありそうな気がする。

子どもの世界では「まさつ」とは「こすること」「すれ合うこと」である。こう書けばいとも単純だが、意味を個々の行為にひきつけて理解する子どもにとっては、「まさつ」とは、木と木をこすり合わせること、鉛筆で

紙の上に乱暴な字や絵をなぐり書きすること、ツメでガラスをこすこと、棒つ切れで塀をこすこと、手と手をこすり合わせること、仲間とおしくらまんじゅうをすること、顔をこすること、目をこすること等、どこまでも広がっていく。そして、それらは完結しない。

木と木をこすれば、熱が出てくる。きなくさくなる。それらは、つぎつぎに話題を呼び起こす。かくして、どこまでも興味は広がっていく。

ブレーキだってそうだ。口笛も摩擦を利用したもので



ある。摩擦電気は衣服の着替えのときにも見られる。

人が集まれば「摩擦」が生まれる。もつれ。もめごと。もんちゃく。あつれき。

摩擦〔物理学的定義〕——接觸している二物体が相対的に運動し、または運動し始めるとき、その接觸面で運動を妨げようとする向きに力の働く現象、またはその力。液体内部でも似た現象があり、これを内部摩擦または粘性という。〔広辞苑〕

もつともな定義だが、人間関係における「もんちゃく」や「あつれき」の方はこうスッキリはいかない。

パズルを解くようなわけにはいかないからである。「もつれ」「もめごと」「あつれき」「もんちゃく」は、解くに越したことはないが、通り一遍のやり方ではますますこんがらかる。そこで、それに対するには、いろいろなやり方がある。

① 「もんちゃく」を避けること。「君子危きに近寄らず」「虎の尾を踏むな」「さわらぬ神にタタリなし」等の教訓の示すものがこれだ。そのとおりにうまくいくか

は保証の限りではないが、ともかくこういう態度も一つの方法であろう。

② 「もんちゃく」に向かい合い、時を待つこと。「待てば海路の日よりあり」「果報は寝て待て」等。こうなれば、教訓なのか、逃げ口上なのか、ゴマメのハギシリなのか、よくわからない。時に委せよ、無理をするな、からはじまつて、時を待て、というのに近い。

③ 「もんちゃく」を乗り超えること。この「乗り超え」も一樣ではない。「もんちゃく」のエネルギーがしほんでしまったから、という場合もあるし、馬鹿らしくなったからというような場合もある。たがいに理を尽くして話し合った結果、とうとうにはならないことの方が多い。

### もんちゃくといぢゃもん

「もんちゃく」は何の必然性もないところからも生まれる。「いちやもん」をつけるというのがその代表例である。イソップ物語にも出てくるが、「いちやもん」は

どうにでもつけられる。「氣に入らない」とすぐまれたらもうおしまいだ。弁解、弁明をやればやるほど退路は閉じられていく。

「いちやもん」をつける方は、初めは遊びや退屈しひきのつもりだったかもしれない。ところが、相手が本気で弁明したり、弁解したりするので、つい本気になつていく。この微妙なメカニズムは、「なぶり殺し」に似ている。ヒューマニズムの清らかさをあざ笑うように、この種の事例は多いのだ。浦島太郎の話だって、海岸で子どもが亀の子を捕えて遊んでいるところから始まつているではないか。

もっとも、あの風景をどう考えるべきか、これも一様ではない。だれも見た者がいないし、見た者がいたとしても（いや、いたらなおのこと）、子どもたちがどのように亀の子を扱っていたかレポートするのはむずかしい。

「たわむれていた」「からかっていた」「いじめていた」「殺そうとしていた」——その他、もろもろの文脈

でレポートがなされるだろう。

あのくだりは、浦島太郎が龍宮へ行くきっかけになるほどのところだから、子どもたちが亀を楽しげに、対等に扱っていたのでは導入の役割を果たさない。童話はこの間の事情を隠してしまつていて、もう少し古い童話は、子どもが亀を「なぶる」と表現していた。「なぶる」すなわち「躊躇する」である。

こうなると、「いちやもん」から、ぐつと進み、すさまじい世界が開けてきそうである。

### なぶる

「なぶる」の漢字は異様である。今日でも地方によつては「なぶる」が日常語になつていて、ある保育園で子どもが電灯のスイッチをいじつていた。すると、保母さんが「なぶってはいけない」と注意をしていた。現代語においては「なぶる」はかくもあつさりした味になつていて、「いじること」「いたずらすること」に近い。しかるに、「なぶる」においては、すでに万葉集のなかに

「もてあそぶこと」として出でているくらいだ。

「なぶり切り」。もてあそんで切ること。

「なぶり殺し」。もてあそんで殺すこと。すぐに殺さ

ず、もてあそんでから殺すこと。

「なぶり立て」。なぶるさまをすること。出しゃばつてからかうこと。

### 余剩のもて余し

一筋縄ではいかないことがおわかりだろう。

「なぶる」には、どうやら隠されてきたところが多いのだ。暇をもて余し、エネルギーをもて余し、自分からだをもて余し、自分自身をもて余す動物。「何か面白いことないか」と、きょろきょろする。「面白いこと」とは、対象を「なぶり」ものにし、そのことによつておのれの余剩を蕩尽(とよじん)したいという厄介な本性のゆえに生み出される。そして、余剩が思うように費消されると「快」であるという動物。古今の倫理はこの周辺をウロウロし、余剩を抑えよといふ結論を出したり、余剩を高

貴な目的追求に向けよと命じたり、少しづつ費消せよとアドバイスしたり、余剩と費消のバランスを取れと応じたりしてきた。

だが、そのなかには子どもが好んで「なぶる」存在であることが含まれていたらうか。

### 時の遅延

ひとつ注目しておかねばならぬ。それは「なぶること」が、せっぱ詰まつたり、やけっぱちだつたり、刹那的だつたりすることはないということである。

(ついでだが、右の「せっぱ詰る」が「切破詰る」という禅宗用語から來ていたり、「刹那」が仏教用語だつたりするのはいかにもふしきではないか。「焼け」の方は、「焼けつ腹」「焼けのやんばち」「焼けつけばち」「焼けっぱら」とも、つぱら音を味わうのも面白いではないか)要するに、余裕があるのである。楽しみを先へ延ばし、その過程を楽しむのに近い。

完全に遊戯化されれば、「なぶる」は、「ひやかす」

「からかう」に近くなる。手を出さず、目で遊ぶ。あるいはことばでからかい、つぎの場面では「あれはカラカイであった」ということが確認され、「もうカラカイのゲームは終了」と宣言されて、もとに戻る。このルールが共有されているかぎり、「なぶり」は笑いのうちに終始する可能性がある。

だが、子どもの世界においては、ゲームと実生活との境界はこんなに明確ではない。だから、ゲームのつもりだったのが、本気になってしまい、「からかい」が「けんか」に移行するのはまことに多いのだ。

だんだんと本気になっていく。これがホントの経過である。一気に、突如に、というようなことはない。

浦島太郎も「なぶり」が導入になっていた。「さるかに合戦」などはどうだろうか。これなどは単なる「いじわる」を超えて、「なぶり」がデンと中央に鎮座しましましていいる。「かちかち山」にいたっては、最初から最後まで「なぶり」のオンパレードだ。

なぜ子どもが亀を「なぶり」ていたか。なぜ猿が蟹に

対して柿を投げつけたか。火傷したタヌキの背に辛子をぬりつけるとは兎もとんだ「なぶり」をしているといえなか。いや、そんなことよりも、この種の物語が、必然性なき「なぶり」に対する復讐の「なぶり」から成っているのに驚くべきではないか。

それは「なぶり」を平板に非難することを意味しない。トンボの羽根をむしりたくなったり、バッタの脚をむしり取りたくなるのはなぜと考えてみると、ことにも通じている。

かにが歩いていく。横に歩いていく。あぶくを吐きながら。もたもた、よたよたと歩いていく。

見ているかぎり、それはそれで一幅の風景のようなのだ。蟻がちょうどよの翅を引いていくのを見て、「ああ、ヨットのようだ」と嘆じている詩人の境地である。しかし、かにがあぶくを吐いているのを見て、手を出してみたり、横にもたもたと歩いていくのはどんなしきみによるのかと、かにを手にとつてみたくなるのは何の境地だろうか。科学者？ 技術者？ 開拓者？

すかさず手に取ってみる——今までには時間の経過がある。どうしようか、取るうか取るまいか——そのあいだには回避も、ためらいもあり、問答もある。

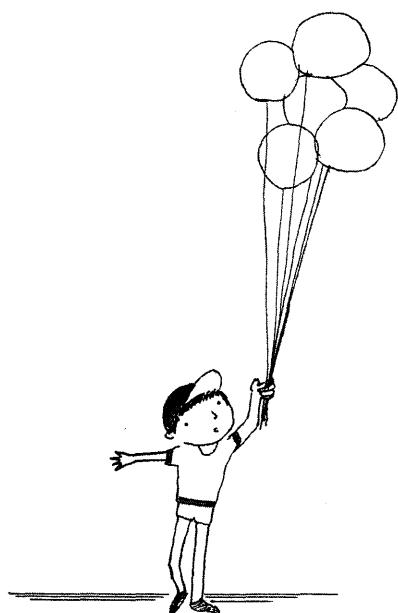
### 異形（フリーク）

かにの形、歩き方、並外れたハサミ、しかも左右非対称。腹部、目。それらが異様に映るからだ。もたもた歩いているのを、親切心で、もつと規則的に歩かせてやろうかという子どもが出てきてもふしきはない。あるいは

絵や写真で見ていた「かにさん」と、実物のかにとの間の落差に驚き、落差を埋めようとして手に取ってみる子がいてもおかしくはない。こわごわ、おそるおそる取つてみる。

馴れてくる。まわりの人が応ずる。「よくそんなものを手にもてるねえ」。その声は、子どもの心をますます積極的にさせるだろう。観客の前で熱演し、拍手を浴びているのに近くなるからである。

「なぶる」は、こうして増幅する。



時間をかけて、ゆっくりと殺す「なぶり殺し」は、相手の苦しむさまを見てよろこぶという奇妙な本性を照らし出す。暴君ネロならずとも、「なぶり殺し」は「こわいもの見たさ」や「血に興奮する」人間の性を照らし出します。

### ゲーム化

物語やスポーツまで、「なぶり」をゲーム化したもののは少くない。ドラマだって、「なぶり」から成るもののが圧倒的。シェイクスピアの作品の大半は「なぶり」が根源になっている。悲劇か喜劇かは相対的な区分にすぎない。めでたし、めでたしで終わるものも「なぶり」を原型としているし、死屍累々たるエンディングで終わるものでも「なぶり」がすべてである。

「なぶり」をゲーム化すること。これによつて、「なぶり」の歯止めを手に入れさせること。これには長い時間がかかっている。

ゲームにはルールがある。ルールを厳格に守るか、そ

れとも「待った」を連発し、そのことで相手をじらし、苛々させ、ついには本当のケンカになるという落語の「笠碁」のような場合もある。これは落語だから、聴いている方は、そう割り切つて聴いている。だから、ケンカがはじまれば、それだけ面白くなるというしくみだ。

現実の夫婦が、ドラマの上で夫婦を演じる。しかも仲の悪い夫婦役を。こんなとき、観客は、思いがけないセリフの出現にとまどいながら、並の場合よりも面白がっている。

### 供養

「なぶり」で終わらせないために、人間は、もうひとつ、供養の世界を編み出した。いたずらに「なぶり」ものにしたのではないこと、使い放しではないこと、の確認のために、供養という儀礼がある。

解剖したモルモットを供養する。夏の日の日にかば焼きにされるウナギを供養するのもひとつの知恵であろう。

供養は、必要性から食糧にされる生物に対するいとおしみの復元である。また感謝の気持の表現でもある。

してみると、物語の世界にあらわれる数々の悪役たちに対しても供養が必要だろう。

悪役は、子どもたちの悪に、非難、憎しみの対象である。裏返していえば、最後は決して勝利者にはなれぬようしつらえられている。途中までは強そうでも、最後はきまつて負ける運命にある。悪役たちは、子どもたちをハラハラさせ、ドキドキさせ、さらに子どもたちの憎しみを全身に浴び、退場させられる。それは子どもたちの情念のトレーナーであり、情念の捨てどころである。

桃太郎の物語に出てくる鬼たち、かちかち山に出てくるたぬき、さるかに合戦に出てくるさる。古今東西の悪役たちは、ワキ役なのかシテなのか。宇宙怪人、異星怪人、異星怪獣たち。彼らはみな子どもたちの記憶から去っていく。わずか数カ月で消えてしまうものもある。忘れ去られ、ある歳月を経て思い出されるものもある。いずれもリアリティを欠く悪役たちばかりであった。

### 身をよろこばす

アタマやココロを喜ばせてくれたあの悪役たちのほかに身を喜ばさせてくれたモノもある。オモチャたちである。もともと子どもに「なぶられ」るようにつくられたモノである。あるいはネンドや絵の具。どのくらい「なぶられ」したことだろう。

あるときは、怒りの対象にされて、こわされ、投げつけられ、放り出された。あるときには、大事にしていたのに、こわれてしまった。

新素材が登場し、これがさまざまオモチャを生んだ。のみならず、新製品は、子どもの世界から「鼻たれ小僧」も追放してしまった。家庭電化製品の数々は、生活に根本的な革命を引き起こし、子どもの生活のなかに新たな食物、スピード、新たな時間をもたらした。目と耳を楽しませる映像の世界も拡大し、居ながらにして宇宙にまで視野は広がることになった。

しかし、よく見ると、「なぶられ」ているのはどちらなのか、不分明になつてきただのである。「なぶられてい

る」という感覚は、よくわからなくなつて、テレビが子どもを「なぶって」いるのか、子どもがおとなを「なぶるのかわからなくなつてきた。

そこから脱出するためには苛々が増し、その苛々がまた別の「なぶり」の対象を求めはじめる。

### かわいそうとかわいい

子どもは、ある時期までカッとなり易かつたり、じだんを踏んだり、泣きわめいたりする。身の喜びをまとげるものに対してはそうやって、抵抗し、自己主張をする。

しかし、時がたち、少し距離をおいてみると、あの気短かで、怒りっぽくて、ガンコだった子がしだいに自己コントロールの力を手にいれていくのが見えてくる。コトバの世界が拡張する。ことばを「なぶる」こと、ことばで「なぶる」ことが並行して進む。

かくて、「なぶり」の対象は身辺から一挙に飛躍し、

時空のベースペクティヴのなかに置いてものを見るという、身も心も喜ばず宝を入れる。

そうなると、「まさう」も「もんちゃやく」も、「しがらみ」も、「いざこざ」も、そのどろどろした姿を変え、関係論といふ半透明なゲームに移される。政治学、国際関係論、人間関係論等々の基本型が見えはじめるのだ。

以前なら、「あら、こんなこと知らないの？」オバカラさんね」などと単一的な応じ方しかできなかつたのに、「あら、これ知らないの？」じゃ、いっしょに考えてみようか」というように「いっしょ」を含んだり、「考えてみよう」という呼びかけとはげましの文脈で応じるようになつたりする。もうひとつ。ここには隠れたメッセージも含まれている。それは、へこういうことばを吐けるまでに成長した／という含意である。この含意がどれくらいふくらみうるか。それによって「なぶる」の意味はトゲトゲしさを和らげていき、やがて笑みに通ずるようになる。

かつての自分。いまの自分。そして、この先の自分。

それぞれのあいだにつながりをつけて、「あの頃の自分のこと」を「なぶって」みることも可能になる。大半はテレくさいことであり、隠しておきたいようなはずかしいこともある。しかし、時の中で、そのことすら「なぶられ」て、意味を変えていく。

あんなにガンコで、怒りっぽかつたあの子がいまではこんなになって——という見方のうちには、「あの子」に対する思いやりが大きいなる笑みとともに浮かびあがる。

どこかこつけいで、どこかおかしく、どこかかわいそうな——あの子。それに自分。つまるところ、そんなやうりとりが重なって、いつて時は流れていく。「なぶる」との中身は、それに応じてどんどん変わっていく。

酷だった「なぶり」が激しくなり、和やかになり、まるでシンフォニーのようにあるメロディを奏でていく。

その奏でる場所が△私△なのではなかろうか。

とすると、だれの△私△、どんな△私△のなかにも、何人かの子どもが住み込んでいて、△私△のなかのオト

ナを「なぶり」、そのことによって△私△の生をゆたかにし、楽しませ、色どりや味わいを与えてくれている——と考えられないか。

子どもはいぜんとして、子ども性となつてオトナのかに生き続ける。オトナがオトナ性をもとに反省することもあり、オトナが内なる子ども性をもとに反省することもある。こう幅を広げて考えると、子どもの風景はまたぐーんと幅を広げはじめる。

(名古屋大学)

# 「自分の力で見る」こと

ルーマー・ゴッデン作 石井桃子訳

『ねずみ女房』（福音館）

森下 みさ子

見知らぬ真新しい世界を、何の構えももたず、自分の力で見ることは、実はとてもむづかしい。意図的にも無意図的にも、わたしたちはものの見方を教わり、とらえ方を習って育つてしまふ。少し哀しいいの方をすれば「育つ」とは、知らず知らずのうちに、人々と共に育つ特定の視線を自分ももつようになることでさえある。何かを生まれて初めて「見た」子どもの目にささるような刺激、

身体のすみすみまでしみわたる不思議、心の芯をふるわせる得体の知れない力など、だんだんと忘れ去られるに伴つて、他のみんなと同じようにものごとを知り、わかり、そしてよく見知った安定した世界に落ち着くようになる。そうなつてしまえば、それ以外の世界を見ようとするやっかいな衝動に突き動かされないかぎり、普通に楽しくくらしてゆくこともできる。けれど……。

## 緑蔭図書紹介

ここに一人ならぬ一匹のねずみの奥さんがいた。めすねずみは極普通のねずみらしい姿たちのねずみだたし、未来の赤ん坊たちのための巣づくりや、だんなさんと自分の食べ物さがしにかまけてくらしてゆけば、それでもよかつた。けれど、めすねずみはわけもなく、「〇〇したい」というはつきりした要求もなく、ただぼんやりと今もつていない「何かがほしかった」。だから、はとがとらえられ金色のカゴにいれられて、めすねずみとことばが交わせるほど身辺にやつてきたのは、めすねずみにとって一生に一度あるかないかの幸せな機会だったのである。それはあくまで偶然の機会なのだけれど、人を尊く偉大な「偶然」は、こうして何かしら求めている心の前にこそ投げかけられるような気がする。

めすねずみは、囚われの身となつたはとの

話に耳を傾ける。朝早く草や葉の上で光っている「つゆ」のこと、麦の上に波を描きながら吹く風のこと、家の屋根や木の梢や丸い形の丘や平らな畠地や遠くの山のこと……聴いているうちにめすねずみは「まるでしつぽの先で立つて、きりきりまいでもしたように、目がまわつてくる」。はとがカゴの中にいるからありありと思い出すようには、めすねずみはこれらのものを目に浮かべることはできない。けれど、めすねずみには感じることができ。はとが大空を自在に飛んでいたころの、あの視界の広がり、大気のみずみずしさ、そして自由であることの生命のふるえ⋮。はとは「飛ぶ」ということさえ知らないこの小さな友だちに思い出すことを話すことで、からうじて生命のみの飛翔を続け、めすねずみはその飛翔の夢に「ほしかった何か」の気配を感じて、心をはずませる。はとが夢

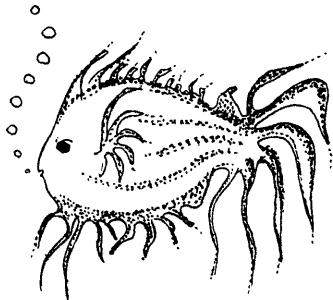
見るようにして話してくれるものが何を指すのか、それが二人に共有されているかどうかは問題ではない。それらがめすねずみが心ひそかに求めていた見知らぬ世界の「何か」であること、その限りない広がりとめくるめく輝き、突きぬける力が、家の隅にあっても二つの生命を結びつけ、外の世界へ向けて開いていることが大事なのだ。だから、めすねずみには全く異なる生を享受してきたはとの哀しみがわかる。

めすねずみは、小さな歯に渾身の力をこめてカゴのとめ金をはずし、弱りきったはとを逃がす。外へと向けられたはとの目には、小さな救い主の姿は映りさえしない。はとは翼を広げ、窓の外へ、木々の高みへ、飛んでいってしまう。「ああ、あれが飛ぶということなんだわ。」「これでわかった。」……めすねずみが初めて「飛ぶ」ということの真の姿を

目のあたりにしたとき、同時にそれが見知らぬ世界との別れでもあることに気づかされる。「もうだれも、丘のことや、麦畠のことや、雲のことを話してくれるものはなくなつた。わたしは、そういうものを忘れてしまうだろう。もうだれも話してくれないし、おまけに、子どもたちは、あんなにたくさんいるし、パンくずや、巣につめる毛ばのことも考えなくちゃならないというのに、どうしておぼえていられるだろう。」……めすねずみは、外の世界と直かには結びついていない。はとがいたから、はとが話してくれたから、めすねずみはその飛翔の夢の翼にのつて、外の世界を感じ、めまうような一時を呼吸したにすぎないのだ。それに比べて日常のくらしは、あまりにもありありと、そして長々と横たわっている。それらを忘れて夢の話に生きるほど、めすねずみは強くない。だんなさん

やたくさんの中坊を放つて、日がな一日外の世界へ目を向けているには、めずねずみはやさしすぎる。だから、外の世界の輝きも広がりも、日常の向うへ遠ざかり、いつしか消えてしまうにちがいない。

そのとき、である。めずねずみの目に星がとびこんでくるのは……。もちろんそれは「星」ということばでは置きかえられない。星のことはだれも、あのはとでさえ教えては



くれなかつたのだから……。けれど、めずねずみはそれが「何か遠い大きいふしきなもの」であることに、自分で気がつく。そして、誇らし気にして。「でも、わたしに見えないほど遠くはない。……わたしには、それほどふしきなものじやない。だつて、わたし、見たんだもの。はとに話してもらわなくとも、わたし、自分で見たんだもの。わたし、自分の力で見ることができるんだわ。」

このとき、はるかな宇宙の輝きとアワつぶ  
のような涙をぬぐつためすねずみの小さな目  
が、どれほど確かな線で結ばれたことか…  
…。自分の力で「見る」ことの透明さ、外な  
る世界を裸のまま「知る」ことのきらめき…  
…、「星」という名前も、その説明もいらな  
い。めすねずみは、自分の力で見ることで、  
どんなに遠くても大きくて不思議でも、真  
新しい世界と自分とを直接出会わせることの  
この上ない悦びを知つたのである。

だけのことだ。きらびやかな光と奔放な風に  
恵まれた夏という季節には、もつと熱っぽい  
冒險の方が似合つているかもしれない。けれ  
ど、何百、何千という夏の光を束ねたよりも  
まばゆく、それでいながら夏の星のまたたき  
のようにやさしく、この小さなお話はわたし  
をとらえてはなさない。それはきっと、この  
お話が未知のものとの夏の出会い、自分の力  
で外の世界を感受する夏の「冒險」の輝きを  
秘めもつてゐるからにちがいない。

(お茶の水女子大)

このお話は、ねずみのしっぽのようによく  
てたわいない。主人公も遊びを食べて生きて  
いるような生命力にあふれた子どもではな  
く、だんなさんや赤ん坊の世話を忙しく狭い  
家を走りまわつてゐるねずみの奥さんであ  
る。それに、めすねずみのことといった  
ら、カゴのとめ金をはずしてはとを逃がした

# 「子どもの本の世界大会」の記録を読む

中村 悅子

この原稿がでるころには、青山の子供の城を会場に開催された第20回IBBY東京大会は、丁度1年前になります。この大会は、「なぜ書くか、なぜ読むか」を主題に掲げる、アジア地区では初めての子どもの本に関する大規模な世界大会で、その後の報告によれば、参加者は、50か国2地域（台湾、香港）から826人、（国内498人、国外328人）の登録があつたといいます。

直前にモーリス・センダック氏の不参加が伝えられましたが、今やブームと言えるような人気のあるM・エンデ氏、根強い読者をもつフィリップ・ピアス氏を始めとする8つの講演、「子どもの本の未来」「子どもの本の創造」「私たちにとって子どもは」という刺激的な3つの分科会があり、そのうえに、今年のアンデルセン賞の受賞者の講演もきけると

いうのですから、期待されました。

そして、この催しを中心に、周辺プログラ

す。

ムとして、東京庭園美術館の「日本の子ども

の本の歴史展」をはじめ、会場の小部屋で催

された「文庫の部屋」まで様々あり、それら

が連日新聞でも報道されて、その夏は、一挙

に子どもの本の関心が高まったように思われ

ました。

それから半年たち、先日和英両文記載の分

厚い論集が届きました。あの熱気が、何をも

たらしたのだろうかとページをくりながら、

私も会に参加して考えたことを思い出しまし

た。そこで、今回は、その資料をもとに、大

会からえた幾つかの問題を記してみたいと思

います。

ところで、文化や社会の違う多くの国ぐに

の人々と話しあうこの種の国際会議に期待さ

れることは、何でしょうか。他の国の実情を

知ることだけならば、現代の高度な情報社会

では、私たちは居ながらにして資料を得ること

が出来るでしょう。大会実行委員長の渡辺

国際大会・国際会議ということ

国際社会の現今では、国際会議の類は物珍しいものではないでしょう。しかし、具体的な体験となるとそう多くの日本人が経験しているわけではありません。日本の地理的、言

語的、そして経済的条件が、日本人の国際社会への参加を少なくしていました。しかし、

現今の日本的情况は、出かけていつて吸収する一方でなく、迎えて示すことも要請される

いるようです。

資料は、一九八六年子どもの世界大会—第20回IBBY東京大会—なぜ書くか・なぜ読むか 一九八六年八月一八日（月）一二三日（土） 社団法人 日本国際図書評議会で

## 緑蔭図書紹介

茂男さんは、開会挨拶のなかで次のような忘れられないエピソードを語っています。

一九七四年のブラジルでの「本は人生の教師」をテーマとする大会で、日本の子どもをめぐる読書状況を報告しました。「ところが、私の報告は、思いもよらず、『現実を無視した物』としてラテン・アメリカ諸国の人達の激しい批判の対象となりました。私は、大人の識字率が非常に低い国々の人々に対して『親が子どもに本を読みきかせる習慣』をすすめ、一般の人達が子どもの本を買うことが出来ない国で『家庭文庫』の育成を提案していました。会議の合間に現地の実情にふれた私は、現実を理解していなかつた自分に気づきました。この恥かしさは、一生忘れることは出来ません。しかし、そのカルチャー・ショックは、私の世界を見る目を開き、異文化に接するところがまえを育ててくれました

た」と。

このことについては、渡辺氏は、かつても記している（「子どものほんの世界」「文学」岩波、1976）ところから、彼の国際的活動の原点となっているものと考えられます。彼の恥かしさ、そしてその後の活動を駆立てたものは、相手国の様子を知らなかつたという知的レヴエルでのことではなく、自分の理論なり、体験の尺度でものを言い、それを良いものとして相手に押付けることは、文化の問題において恥すべきことだと認識です。

意見を主張することと、理解し分かちあうこととは違うということが良く分るのが、ある意味で国際活動の第一歩なのかも知れません。

この様な目で分科会の発表を読んで見ると、それぞれの方の論点も論じかたも様々ですが、意見をかみ合わせ、参加者の意見も

いれて話し合う事の難しさを見、司会者の苦汁のまとめも読み取る事が出来ます。司会者の一人の松岡さんは、これらの経験から、話し合には、一、時間が必要な事、二、発表の技術 三、聞き方などに就いて考える必要を述べていますが（「ことものとしょかん」No.三一）、うなずけることです。

#### 講演するということ

ここには、八人の基調講演が、おさめられています。この講演当日に、私たちは、早くもその資料を入手出来るので、その内容は読んでも知ることが出来ます。

#### しかし、私が改めて発見したことは、読む

ことと聞くこととの間の違いを感じとったことでした。その演者が、ステージに現れて話すとき、私たちは、その言葉に託された内容とともに、まさにその人となりと対面しま

す。活字になったものからそれを捉えるのは至難です。しかし、目で見直すことによつて、今度は話し手の話の組立てをあとづけることができます。その人が自分のテーマにどう取り組んで、言葉に構築しているかを見ることが出来ます。この点で、両極を示しているのがM・エンデ氏と安野光雅氏でしょう。前者が、強固な構築の例とすれば、後者は、極めて即興的な例といえましょう。

エンデ氏はなぜ書くかの問い合わせ、冒頭「むかで」の話を導入に使いました。その語り口に引かれて、聞き手が笑っているうちに、それが見事な比喩であることに気づくのです。

物語作家らしくその小話にたくして、問い合わせ、つまり「意図をもたない自由な遊び」を鮮かに見せてくれたと言えましょうか。これにたいし、安野光雅氏は、思いを現すエピソ

ードをつなげる中に、流れに身をまかせるふうにしながら話します。スピーチに対するありようの違いを感じました。

この講演での、もうひとつ面白さは、何人かの演者が、自分の美しい子ども時代を語つたことでした。

ブラジルのアナ・マリーナ・マシャードさんは、子どもだったころ、信じられないくらいたくさんの昔話や妖精物語を知っていたおばあちゃんと過ごした夏を語っています。「毎日、日がくれると、お話の時間になりました。おばあちゃんが、ハンモックに座つて、ゆっくり身体をゆすりながら、お話をしてくれました。お話の時間は夜だけのものと決められていたからです。昼ひなかにお話をすると、シッポがはえて来るというのです」と。マシャードさんの場合、この体験が長じてお話を作ること、更に「言葉が見える」こ

との秘密につながるのです。この人の作品を是非読んでみたいと思いました。

子ども時代の話といえば、今回「なぜ読むか」の面から子どもたちの体験の発表があつたことです。楽しみの読書へといざなつたものはなんだつか、その軌道が率直に語られていて参考になるものです。

最後に、文学の仲間が敬愛のまなざしを注いだオーストリアのライトソンさんのアンデルセン賞受賞スピーチにふれておきましょう。彼女は、ご自分の幸せな作家生活を語りながら、今や文学の世界もまた経済価値のなかにまきこまれなんとしていること、しかし、「子どもの本に関心を持つている共同体」が生残つていく事で物語も残ることを述べ、感銘を与えるものでした。

(大妻女子大学)

「河童が覗いたヨーロッパ」

「河童が覗いたニッポン」 妹尾河童 新潮社

「第一回・NTTふれあいトーク大賞100選」NTTアド

## 早川 好江

これは、「ご趣味は?」と尋ねられて「読書です」と答えられない私から、私の同類の方達に贈る、『電車の中でも読める本』の紹介文です。

夏休み——サマーパケーション——旅。

夏休みは、楽しいけれど神経を張りめぐらして過ごした保育の日々の中で、蓄積された疲労という澱をとり、エネルギーを充電でき

る、ありがたい数週間です。そして、幸か不幸か、世話してあげるべき誰をも持たない私は、浮き世を離れ、こどもを離れ、異質な世界に身を置く旅こそが、その一番の手段になっています。

『河童が覗いたヨーロッパ』は、私に旅を見直し、さらには、日常の生活や保育にまで考え方をめぐらす機会を与えてくれた、刺激的な本の一冊です。

## 緑蔭図書紹介

河童さんは、舞台美術家で、古くは「ミュ

ー・ジックフェア」、近いところでは「NIN

AGAWAマクベス」「リゴレット」を手掛

けていた方です。その河童さんの、全くプラ

イベートな旅日記が、面白さ故に回りの人達

をまきこみ、出版にまで発展したのが、本書

です。ヨーロッパの安ホテルの記録に、三分

の二以上を費やすという、とんでもない構成

が本書を特徴づけています。

旅に出て、名所を観光するだけでなく、あ

りとあらゆることに、目を向けていくこと。

それが、全編を通して流れ 기본姿勢です。

つまり、河童さんにとって、ホテルの部屋

の造りすら好奇心の対象であり、そこに住む

人々の感性を知る手がかりとなっているので

す。窓の大きさ、車掌さんの制服、バスの乗

り降りの仕方、じっくり当り前の出来事に、

河童さんの興味は尽きることなく続いていき

ます。

これまで、私なりに自分の力で歩く旅をして

きたつもりでしたけれど、まだまだ私の感

性は甘かったと、その視点の多様さに、私は

驚かされるばかりです。感性の豊かさで、見

えるものが違ってくる、保育の原理と同じで

す。

そして、私はハタと気づきます。この視線

は何も旅の途次ばかりでなく、自分の身の回

りにだつて向けられる！

例えば、「パリのスイングドア」というほ

んの二ページがあります。押しあげたあと、

はねもどつてくるドアを通った後の、ヨーロ

ッパ人と日本人の違いに、河童さんは気づく

のです。つまり、ドアを持つ手をすぐには離

さず、後から来る人を待つてから離す彼等

と、すぐに離して後から来る人に迷惑をかけ

る私達日本人と。

私は世の中を見渡します。確かに後ろを確

認してから手を離す人は数少なく、サッと通り過ぎることが殆どです。実はかくいう私も

日本人で、私より先にこの本を読んでいた姉にまず観察され、初めて、手を離していくたどいう事実を知ったのです。後の人のことと思えば、少し押さえていた方がいいな、私は納得します。ところが、ボーッと通り過ぎた時、ハッと気がつけば既に手は離れて。今度は、小さな頃から身につけた習慣の持つ威力にびっくりします。ということは……。

自分を大切にし、それだからこそ他の人も大切にできる人に育つて欲しい、そう思って保育をしているけれど、見落としていることがあるのではないか。知らずに育ててしまっているよくない習慣がありはしないか。私の立居振舞いの中で、どれだけ他の人が意識されているのか。思いは様々に湧きあがつてくることになるでしょう。それにしてもこども

本の説明からちょっと離れてしまいました。本題に戻りましょう。

この本を紹介するにあたり、心配なのは、旅好きでない方がどう読まれるかということです。スイングドアの例の通り、自分の回りの出来事に置き換えて読むことも、魅力のひとつなので、面白く読んでいただけるのではないかと思うのですけれども。

ひとつだけ難を言えば、河童さんの視界の中で、子どもは遠いところにいるということ。例えば、日本人である河童さんに対し、どんな反応を見せたかなんてことが入っていたら、私にはもっと魅力的だったことでしょう。尤も、そこまで望むのは、身勝手が過ぎるというもので、それを私の目でキヨロキヨロ気がついてくることが、私の旅をつくりだすことになるでしょう。それにしてもこども

## 緑蔭図書紹介

を離れようとして離れきれないのは、保育者のさがなのでしょうか。

ヨーロッパ編を読んで、河童さんとの相性が良さそうだと思われた方には、さらに、「河童が覗いた日本」をお勧めします。こちらは、もともと「話の特集」に連載されたもので、公表を予定して書かれており、ヨーロッパ編の「ひとりごと」に対し、「講演」といった趣になっています。その為、ヨーロッパ編に見られる新鮮な感動は、少なくなつてあります。河童さんのおもむくままに、何事も見逃すまいとする河童さんの姿は同様です。

そして、言葉が通じる分、納得のいくまで調べつくそうといふ姿勢が強くなっています。

「京都の地下鉄工事」「裁判（傍聴のすすめ）」「皇居」……本書を通して、日本人でありながら、全く知らずにいた日本の姿を、私

達は目の当たりにすることができます。また、解説の文字までもが、遠近法にのつとつて描かれている綿密な俯瞰図は、それだけで、電車を乗り過ごしそうになる楽しさです。また、その内容の殆どが、七、八年前のものであり、今、どうなつているかを考えるのも、一興です。

ところが、「へえー。ふうん。そうだつたんだ」うなづきながら読み進むうちに、少しずつ、河童さんのつぶやきが聞こえてきます。「ところで、あなたはどう思うの?」「読み終えて、忘れてしまってなく、僕が疑問に思つてゐること、考えてみてほしい。その上で反対するもよし。でも、僕と同じに思つてくれればうれしいな」

声高に、説得しようとするのでなく、あくまでも私がどう思うかを大事にしてくれている河童さんです。そして、この姿勢こそが、

この本の一番の魅力になっているのだと思ひます。

「第1回・NTTふれあいトーク大賞一〇〇選」という文庫がNTTから出されました。トークの日にちなんで、定価も百九十円としゃれています。

題名の通り、「誰かに伝えたいうれしかったこと、感動したことをお寄せください。」というNTTの呼びかけに集まつたトークエッセイの中から、百点が、掲載されています。ショートショート風あり、新聞の投稿風あり、書くことのプロでない人達が、自分内にとどめておけない感動を、思い思いの言葉で語っています。世の中、まだまだ捨てたものじやない、そう思わせてくれるエピソードが、いっぱいつまっています。

本当に気軽に手にとれる本です。でも、全

ての本がそうであるように、何を読みとるかは、読み手次第。人間関係論、社会福祉論、文体論、etc. ただ、批評する——読むこのプロ——でない私には、少しだけ気持ちの沈んでいる時に、ありがたい一冊でした。

(まんとみ幼稚園教諭)

## 緑蔭図書紹介

「人間のやさしさ強さ」 金沢嘉市著 童心社  
「全盲達ちゃんと和光」 渡辺由利編著 星林社

村石 京子

人間はやさしさと強さと両面をもつた人間でありたいと日頃から思っている私としては、先ずこの本のタイトルにひかれるものが、あつた。そしてさらに、以前から金沢氏の講演などをうかがつたりしたことから、氏の語られるものに大きな味わいを感じ、氏のもつてている教育的信念を尊敬していたことなどが、この本を読みたいという動機づけであつた。

金沢嘉市氏については今さら御紹介するまでもないと思うが、四十年以上小学校教育にたずさわり、子どもたちへ深い愛情を注ぎ、小学校教育に多くの情熱を注いでこられた教育者として、広く知られた方である。氏の長く積まれた教師体験と、子どもたちに対する情熱によつてつくられた教育理念は、頭の中や机の上で組みたてられたものではなくて、実践の中から生まれたものであり、明日の子

どもたちを育てるための実践へとつながっていくものなのである。この実践へつながるものを求めていく金沢氏の気持があるからこそ、私たち現場人にとってもまた、明日への指針として心うたれるものがあり、心の中に残されるものが多くある所以なのである。

この本の中ではまず、現在の子どもたちの様子、そして子どもをとりまく社会環境についてふれている。現在の社会環境は、家庭、学校、社会の全てが小さい頃から成績中心の人間観をつくりあげ、勉強の振わない子どもには劣等感を植えつけている。それがもとでいろいろな問題を起こす子どもをつくり出し、片方では勉強しか出来ない子どもをつくつていてるような現状である。金沢氏は明日の社会をつくる今日の子どもたちが豊かな人間として育つしていくために、これから教育の重要課題として次の三つをあげている。一、

自然の回復、二、人間性の回復、そして三に平和の推進という課題である。

成長期の子どもたちにとって最も大切とされるのは、自然の中で生き、自然の恵みをうけながら、優しい心情や感性を育てていくことにあると述べている。人間は自然の中で自然に育つとさえ言えるであろう。また大切なのは、子どもが子ども同士で遊ぶこと、遊び時間を多くもつことなどにある。遊びを通して子どもたちの社会性が自ら育ち、人間関係の基礎が育っていくことを思えば、遊びはいくらあつても多すぎるということはないであろう。

そしてさらに、子どもを育てる役割としての大人たちが心をこめて子どもに接し、愛情をもつて育てることが如何に大切かを述べている。母としての愛、父としての愛、兄弟の愛、そして教師の愛が子どもに注がれること

緑蔭図書紹介

か。により、子どもは豊かな人間愛をもつた人として成長していくのである。また、子どもも教師とともに学びあうためには、健常児とともに障害児を教育することが如何に大切であるかを語っている。ともに生活することによって生まれてくる友情と理解と連帯感は、新しい社会のない手となる子どもたちにとって、不可欠なものといえるのではないだろう。

最後の「子どもたちに平和を」という項目では、世の中では次第に戦争の体験が遠くなったり、一方では再び軍事大国へと歩みつつあるような傾向がみられている。このような現在を危惧し、教師の責任の重大さを論じるとともに、人間の尊厳を守り得るためにも、平和の教育の大切さを信念をもって述べておられ

き込まれていると、教育の最も根幹としなければならない「人間を育てる」ことが、教師自身の中でも次第に薄められていくような現状である。こんなことでよいのだろうかと教育にたずさわる者は誰しも心の中では思いながらも、現在の社会機構や教育態勢の波に押しうまれて、育つべき子供たちが育つべき道筋が見えなくなっている。しかし子どもによく育つてもらいたいと願うならば、先ず子どもを育てる役割をとっている私たち大人が、何が最も大切なかを自分自身ふりかえってみたり、しっかりととしたものを自分の中に自ら育てていかなくてはならないと思う。そんな気持をつくり出す力となる機能が、この本の中にはたくさん含まれているようだ。

追いつ追われつの点数主義の教育の中に引

ある会でよくお目にかかる方から「一年前

に亡くなつたといとこの渡辺由利がのこした実

践記録『全盲 達ちゃんと和光』がまとまつたので読んで下さい」というお手紙とともに、この本が手元に届けられた。

和光幼稚園の共同教育の記録ということで、同じ道にある者としての期待で、本のページをくつた。

「共同教育」とは「共に育ち合う」ということであると書かれてある。そして和光幼稚園での障害児を受け入れていく姿勢は、次のことである。「人間を教育するということで、健常者と障害者を差別的にあつかうことがおかしいという前提にたつていた」「社会的弱者に対して温かく配慮することは、ともなおさず人間の尊厳を教育の基本にすえることである」この教育理念に基づいて、和光では普通学級の中で教育できる可能性があると思われる障害児を受け入れていくことは、

あたり前の教育なのだつたとある。

障害児を受け入れているところは、近年多くなつてゐる様子であるが、「統合教育」という考え方で障害児教育を行なつてゐるところがあるが、ここではそうではない。健常児のためにも、障害児のためにも「共同教育」をすることが必要なのであって、両者が共同で、学び合い、助け合いして進んでいくという考えが基本にある。

受け入れの視点は、健常児と一緒に共通になる部分を大事にしながら、障害をもつた子どもも、他の子どもたちも含めて、発達を保障しようと判断した場合に受け入れていく。「共同教育」は障害児も健常児も、人間としてわけへだてのない見方が出来、かかわりあるいはもてる子どもたちを育てていくことになるとある。こうした基本的考え方と、教師のもつ深い愛情とたんねんな関わり方によつ

## 緑蔭図書紹介

て、全盲の達ちやんと級の子どもたちとの四才児学級の集団づくりは出発した。

勿論その毎日の生活の中では、教師も子どもも達ちやん自身も、最初はとまどいや、手さぐりの部分が多くあつたのかが、記録の中で読みとつていくことが出来る。どんなにか大へんなことであつたろうかと思う。そして言葉では特別扱いをしないと言つたとしても、全盲児を級の中に受け入れていくことは、並々ならぬ担任教師の気遣いもあつたことは察せられる。しかし初めから特別のこと

はしないが、その子の障害をよく理解した上で、必要な場合は介助していくという教師の態度に影響されて、級の子どもたちも達ちやんを全く自分たちの同じ仲間として、早くからごく自然に受け入れて対応していくようになつたのである。

こうした子どもが加わると通常は相手を助

ける、いたわる心が強くなり、子ども同士の関係もいたわり、いたわられる関係をつくり出し、障害児はそれに支えられ、健常児には人間としての優しさを育てていく上に大へん大切な機会となるというように考えられることが多い。しかしここでは全く同じ友だち関係をもつて、お互に学びあい、ともに育つといふ関係におかれているのである。この共同教育という精神は、お互に人間として豊かな発達をするために大きな意味があるといえると思う。

配慮があまりに先に立つてしまつては、良い意味での緊張を伴つた人間関係はつくられない。子どもたちが毎日の生活の中で、友だちとぶつかりあり、けんかをしながらも仲間として認めあつて仲よくしていくのでなければ、自然な関係の仲間同士とはいえないし、「共同教育」ともいえないであろう。教育内

容や生活や、子ども同士の成長や種々の面での考察や配慮とともに、達ちゃんと仲間との生活が展開されていったのである。そして勿論その中に忘れてならないのは、担任教師の大きな愛情と努力があつたからこそ、実つていつたという点である。

必要に応じて援助の手を差し伸べていくこと、これは級の仲間と、担任と、そして周りの大人たちと、達ちゃん自身にとって、人間への信頼と可能性を求めていく生き方として、協力と共同の力によつてすすめられてきた。このことは和光で学んだ達ちゃんばかりでなく、人間は共に育つていくという人格形成上のかけがえのない宝を周りのみんなが手にすることが出来、その喜びを教えられ、味わうことが出来たとある。これが「共同の教育」として価値のあることであろう。不幸にして渡辺由利さんは病気のため亡くなられた

が、これからも和光では実践を通しての「共同教育」は続けられることと思う。

私にもいろいろなことを教えてくれることの多い、尊い実践記録であった。読み終えて再び表紙をみると、そこに描かれている梅田俊作氏の絵は、まるで渡辺由利さんの子どもたちへの深い愛情がにじみ出てくるような感じがして美しく、いつまでも眺めてしまうのであった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

### 「サンペイ・ベルジュン・パ・ラギ」

かつおきんや作／永井吐無絵 リブリオ出版

近藤 伊津子

この稿にとりかかった時、私は少し苦笑した。たしか、昨年『カンボンのガキ大将』ラット・晶文社をこの欄に紹介したこと思い出したからである。あれこれ迷った末にこれに決めた時はそのことをすっかり忘れていたのだ。

この春、一週間、マレーシア国の天文学者一家がわが家に逗留した。彼女の夫と六才の息子の来日までの半年間は、幾たびも夕刻に

なると訪れ、夜遅くまで語っていく。マレーシアと日本の文化、ことに女と子どもに関する話は女同志の誼で尽きぬものであった。インド人の父とインドネシア人の母を持つ彼女は皮膚の色や黒く、彫りの深い顔立ちで大きな目をしており、インド人を思わせる。夫は先祖が中国の廣東の出で、いわゆる華僑。息子は父親の皮膚と母親の顔立ちを受けつぎ、国籍不明に見える。ことばも、家族間、

親子では英語、彼女の母とはマレーシア語、夫のみ広東語ができるという。

このように、マレーシアはマレー人がやつと過半数、中国系がその二分の一、およびインド系……という多民族国家であり、一つの国の中のマレー人と中国人の対立は、宗教上（イスラム教と佛教）から経済問題と根深く、互に反目があるという。その中で自分達の結婚がいかに困難であったか……。彼女はイスラム教徒として育てられ、豚肉を食する中国人を汚いと教えられたという。しかし、この結婚は教育をうけることで、つまり学ぶことで、そのいまわしい偏見を捨てることが出来た一つの証であること。国内外の反目は教育の力でこそなくすことが出来ると、力をこめて静かに語った。

彼女のおかれの状況を知ることでマレーシアという国を身近かに感じた。

しかし、マレーシアと日本との過去のかかわりについて、又、現在のマレーシア在住の日本人については決して語らなかつた。英国人が未だにどんなに侮蔑的にふる舞つているかは語つたが……。

彼女一家が日本を出発したあと、そのことに気付いた。

大変前置きが長くなつてしまい申訳ないことであるが、この本を登場させるには、こういう背景のあつたことを抜きにはできなかつたのである。

物語は少女ミカの父親がマレーシアに単身で赴任するところから始まる。続いてミカの名古屋市内の公立中学校への入学、学校生活の一端が描かれているが、これもこの物語の重要なアプローチである。日本の現状を具現化されているのが公立中学校であるから。

## 緑蔭図書紹介

父親の赴任地マレーシアのクアラ・ルンプールに出かけ、一週間をすこす。その間、少女は日本とマレーシアとの深いかかわりを知り、マレーシア人にそれがどんな影響を及ぼしたのか、求める者にのみ与えられる糸をたぐり寄せながら旅が展開されていく。そして、かつて日本軍の日本人がしたことのかい間知り、マレーシアの傷を知る。

二度と戦争をしないことを、日本人の一人として誓い、平和を祈り、そしてこの国で中学生生活を送りたい、この国をもつと知りたい、人々と親しくなりたい、と思う。仕度のため一度帰国するところで物語は終つている。

父親の住居の隣人のマレーシア人一家、マラッカでは、魚売りの女、古い教会の前で話しかけて来た“シレーブニ・イタ”老人、か

つての興亞訓練所にいたリヨン先生、名古屋

で遇然見かけたことのあるカマリアさん……、ミカに接するマレーシア人は全てやさしく、どこまでもおだやかに微笑む。けれどもその皮膚の下には、決して癒されることなく傷がうずいていることも知る。

マラッカ海峡をのぞむ海岸で出会った中国系の青年。彼は祖父から聞かされてしつかりと憶えていることを話す。マラッカでの中国系マレー人の虐殺の様子を。

決して、そのことを忘れて微笑しているのではない。持ちまえのおだやかな国民性とあわせて、アジアの一員として親しみを込めていることをミカは知るのである。

そして、二度と、日本が戦争をしなかつたらその時にこそ、日本のマレーシアにしたことを、この國の人々は許すのだと、この青年をして語らせる。

ミカの中学校生活、かつての軍事教練を思

○

わせる場面が挿入されているが、マレーシアの人が望むように、ミカがマラッカ海峡で祈ったように、日本が『一度と戦争をしない』方向に歩んでいるのか、考えさせられるところである。

著者の後書き『取材ノート』にもあるがマ

レーシアの年輩者たちが、子どものころ学校で習ったという「君が代」をうたつてきかせたと。日本はマレーシアの子どもたちに「君が代」をうたわせ、日の丸をかかげさせ、日本語を教えていたと。しかし、この歌こそ、40数年前に、日本がつけた傷あとにはかならない。こんなふうに、子どもたちの心を侵略していたのである、と記している。

「日本人だけがあの戦争のことを忘れています。みんなおぼえているのに」と。

重いテーマを少女の旅行として語りかけさせ、読む者に宿題を持たせる。

「はじめての海外旅行2」であり、1はフィリッピン編、3はインドネシア編である。

やゝ、平坦に流れており、表現の深みに欠け、ものたりなさを感じさせるが、近隣のアジアの国を少しでも手元に引きよせてみると良書であると思う。子どもたちのみならず大人たちも共に読み語りあう本である。

(かつこう文庫主宰)

### 「グリム童話」と三人のグリム兄弟

(ヤーコプ・グリム、ヴィルヘルム・グリム、  
ルートヴィッヒ・エミール・グリム)

美谷島いく子

この信州にも、待ち遠しかった五月が巡つてきました。私は、朝の光の中で、窓を開け芽吹いたばかりの公孫樹、櫻、白樺の梢を渡ってきた若緑の微風を、心地よく感じながら筆を執っています。

「グリム童話」とそれを世に送ったグリム兄弟、即、兄のヤーコプ・グリム、弟のヴィルヘルム・グリム、そして更に、第二版の「グリム童話」に口絵とさし絵を描き、子どもにより身近かなものにした末弟のルートヴィヒ・エミール・グリムについて、したためてみようと思うからです。

怡度、一年前の、この爽やかな季節、野の花が咲き、小鳥が歌う五月に、私達一家は、三年ぶりに、西ドイツの、グリム兄弟縁の大学の街マールブルクに滞在する機会を得ました。

マールブルクは、グリム兄弟が、ザヴィーイ教授と、運命的な出会いをし、後期浪漫派の人々との交わりの中で、グリム童話の種を育み始めた地です。又、このヘッセン地方からは、「灰かぶり」「金の鳥」等のグリム童話が、名も知れぬ人々の口伝えに従つて集められました。今でも、市庁舎の近くにあるグリ

ム兄弟の下宿から、ザヴィーニ教授の家に通ずる坂の多い石畳の道を歩いていると、昔話語りのおばあさんのような民族衣装を着ている老婦人に、時々、出会います。

私は、限られた渡独の荷物の中に、迷わず、岩波文庫、金田鬼一訳の「グリム童話集」と高橋健二著「グリム兄弟」(新潮選書)を入れました。私のドイツへの旅は、グリム旅行(ライゼ)でもあるのですから。

「今更、なぜグリムを?」と、訝しげに思われるかもしれませんのが、実際に、毎日、娘

に様々の話を読んでやつていて、最も、目を輝かせて聞いてくれるのが、他ならぬ「グリム童話」だったからです。適当な話や絵本がみつからず、何にしようかと迷う時、決して娘の期待を裏切らないのが、「グリム童話」なのです。

更に、不思議なことには、娘にグリム童話

を読んでやつて、いる私自身が、グリムと初めて出会った幼い頃とか、学生時代に、河合隼雄先生、秋山達子先生の講義に胸踊らせていた時とは、全く違う所に、妙に心をひかれてしまうことです。一人になった時、何度も心の中で、その件(くだり)を言ってみるとが多いのです。

私が、どんな件を、つぶやいてみるのかは想像に、お任せすることにして、ドイツでの娘とグリム童話との出会いを、少しお話してみましょう。

娘達も、この季節には、とりわけ元気で、ゲステ・ハウスの前庭を、風のように走り回りました。葦、白詰草、達磨草、蒲公英や、他の名も知らぬ白や紫の野の花を摘み、ルートヴィヒ・エミール・グリムがグリム童話集の口絵に飾ったような花環を編んで、王女様の冠にして歓声をあげていました。

## 緑蔭図書紹介

そんなふうに遊び惚けた後でも、まだ、おめめは、パツチリで、ベッドに入つても、グリム童話をせがむので、毎晩、ひとつずつ話してやるのを日課としておりました。

六才になつたばかりの長女は、「三枚の鳥の羽」の話が大好きで、全部覚えて、隣人に話してやつたり、その話の中からの遊びを、よくしました。

：（王様は、王子たち）三人をお城の外へつれだすと、鳥の羽毛を三枚、空へ吹きとばして、「この鳥のはねのとんでいくほうへ出かけるのだぞ」と言いまし  
た。一枚のはねは東のほうへ飛んでいきました。もう一枚は西のほうへとんでいきました。けれども、三枚目のは、まつすぐに飛びあがつたばかりで遠くへはとんで行かず、まもなく地面へおちました。それで、一人のお兄さんは右へ行き

ました。もう一人のは左へ行きました。  
お兄さんたちは拔作をあざわらいました。拔作は三番目の羽毛の番人として、いつまでもそれはねの落ちてきたところをどくわけにはいかないのです。

拔作はべつたりすわって、しょんぼりしていました。ところが、ひよいと気がつくと、はねのそばに落とし戸がありま

す。……（岩波文庫「グリム童話集」

〔二〕

この件、絨毯、指輪、花嫁を探しにゆく所で三回出てきます。

娘は、この三枚の羽毛を、空へ吹き飛ばして三兄弟が行く先を決める所に、すっかり心を奪われてしまつたらしいのです。昔、ドイツでは、行先が決まらない時、羽を吹いて、それが飛んで行った方向に行く習慣があつたそうです。娘は、マールブルク大学の植物園

や、ウイーンのブルク公園等に、散歩にゆきますと、必ず、鴨や白鳥の羽を拾ってきては、羽を飛ばしてみる遊びを始めるのです。

特に、三枚目の拔作の羽が、真っすぐに舞い上がり、落ちてくる所が不思議らしいのです。見ておりますと、風が少しでもあると、羽は、その方向に飛んで行ってしまい、なかなか抜作の羽のように真っすぐ下へは落ちません。

ある時、娘は、「ドイツには、一杯、羽が落ちているでしょう。羽って、<sup>(魔)</sup>魔法使いの魔法の杖みたいに、とても不思議に思えるの……もしもしかしたら、羽が落ちた所から、戸が開いて、カエルが出てくるかもしれないでしょう。」とポツンとつぶやいて、折紙で囃を作り、囃の家を作つて、一人で、長い間、遊んでいました。

小鳥の声で、早く目覚めた時には、娘と一緒に

一緒に、近くのパン屋さんに、朝食用のブローチヒエンを買いに行っておりました。そこには、「ヘンゼルとグレーテル」の魔女のパン焼きがまに似た、大きなかまどがありました。実は、それは、パン屋の店員さんが休暇で旅に出てしまつた日に、裏口から庭に入つて、パンを買ったことが一度あり、見たことです。

「ヘンゼルとグレーテル」と言えば、娘が何度も話してとせがむ話のひとつです。とりわけ、お菓子の家を、ヘンゼルとグレーテルがかじる所の科白が大好きです。

#### "Knusper, knusper, Kneischen,

Wer knuspert an meinen Häuschen?"

「ボリボリ、ボリボリ、ボーリボリ！」

わたしのおうちをかじつているのは、だれだい！」

子どもたちは答えます。

## 緑蔭図書紹介

“Der Wind, der Wind,

Das himmlische Kinde”

「風だよ！風だよ！

天の子だよ！」そりやつて食べつけました。

(小沢俊夫訳「完訳グリム童話」I)

風だよ！の後の部分は、最初はなく、ドルヒュンからの書ききにより一八一九年の

第二版から付加されたといいます。

娘は、「お母さん、ぼりぼり、がりがりの所を、魔女のよう、怖く言つて」とせがみます。そして、次の「風だい、風だい…」の件を、自分流に、種々、変化させて、言つてみるのです。

いよいよ信州松本は、標高が高い為か、山の多い北国へッセンと同じく、季節により、様々の風が吹きます。子どもは、とりわけ、その風を敏感に感じとっているようです。娘は、特に、風の話が好きです。宮沢賢治の「水仙月の四月」「風の又三郎」そして、今、お話ししている、グリム童話の中を吹き渡る風。

「風つて素敵でしよう。いろんな所へ自由に行けるでしよう。縄とびしている時、走り回っている時、私の回りで、風が起るの！  
百六十年前には、ドルヒュンは、ここをどんなふうに語つたのでしょうか。歌にして語つたのかも知れません。ヘッセン地方の、童歌だったのかも知れませんが、文章化され

てしまつた現在、それを知る由もありません。

しかし、科学的眼差の兄ヤーニョと、詩的

眼差の弟ヴィルヘルムという絶妙なコンビから

生まれた、グリム童話の言葉が持つ、不思議な生きた力が、遙かな時代の流れを越えて、

娘の唱える言葉の中に、みずみずしく蘇つてくるのを感じます。

お母さんも風になつてみたいでしょう……

髪を長くしている娘は、時々、こんな言葉

も唱えています。

「ふけ、ふけ、風よ、

キュルトぼうやの帽子をとばせ、

きりきりましいをさせなさい、

わたしがかみをあんで、きれいに

またゆいあげるまで。」

(高橋健二訳「グリム童話全集」Ⅱ)

センダックは、「子どもたちは、グリム童話のすべてに内在する意味を読む」と言って

いますが、娘も、今まで述べてきたように、

グリム童話に対し、特別の感受性を持つているようです。何故、子どもが、昔話に、特

別の感受性を持つのかは、フロイト派のベックハイムやユング派の人々の著書に触れられています。核家族の中で育っている現代の

子どもには、グリム童話は、その出版当時よ

りも、必要なものになつてているのではないで  
しょうか。

「グリム童話」は、安易な翻案絵本や、漫  
画調のものも多く出版されています。残酷な  
部分を省いてしまつたり、変えてしまうよう  
な擬い物でなく、子どもに与える時こそ、原  
本に、忠実なものを選ぶべきです。

幸福なことに、私が初めて、グリム旅行を  
した四年半前には、日本語になつていなかつ  
たものが翻訳され、身近に入手できるようにな  
りましたので、それも含めて紹介します。

○一八五七年の第七版・決定版からの翻訳  
「グリム童話全集 全3巻」高橋健二訳、S

51年、小学館

「岩波文庫、完訳 グリム童話集 全5冊」

金田鬼一訳、一九七九年改定

○一八一九年の第二版からの翻訳

「完訳、グリム童話—子どもと家庭のメルヒ

## 緑蔭図書紹介

エン集—全2巻』 小澤俊夫訳、S 60年、ぎょ  
うせい

これは、訳者の言うように、口伝えされ、  
耳で聞かれてきたメルヒエンの姿を尊重して  
あり、素朴で耳から聞くのに適しています。

この版の口絵には、ルートヴィヒの描いた  
「兄と妹」花環、フィーメニンが再現されて  
います。私は、K. Dielman の本でこの絵を  
見て感動し、ルートヴィヒの「兄と妹」の水  
彩の原画を求めて、ハーナウの城を訪ねた、  
何年か前の夏の日のことを懐しく思い出しま  
した。

完訳では、ありませんが、母親が子どもに  
読んであげることを考えて翻訳されたものに  
「語りつぐ グリムの昔話 全2巻」乾侑美  
子訳、一九八四年 ペンギン社 がありま  
す。

さし絵を楽しみながら読むグリム童話とし

ては、ルートヴィヒの他に、センダック著の  
「ねずみの木」エルベルトから出版されてい  
るオットー・ウベローデの全3巻がありま  
す。

ところで聖書に次いで世界じゅうの子ども  
に親しまれている、類まれな作品、グリム童  
話を、世に送ったグリム兄弟とは、どんな幼  
年期を過し、どんな生涯を送った人でしょ  
うか。

「グリム兄弟」高橋健二著（新潮選書）  
は、そんな疑問を解くのに最もすぐれた、グ  
リム兄弟の本格的伝記であると思います。私  
が、この本に出会ったのは、今から、十年前  
です。

幼年時代を、ハーナウ、シュタイナウの豊  
かな自然の中で過し、どんなしさやかなもの  
にでも心を留める繊細さを培っていたことが

後の、野の花としてのメルヒエン蒐集の基になつたこと。メルヒエンの蒐集には、一八〇八年のザヴィエニ教授の子ども達に送つた手紙から始まり、一八五七年の決定版に至るまで、実に五十年の歳月をかけて取り組んでいること。グリム兄弟が、単にグリム童話だけではなく、古代ゲルマン文学、法律学、言語学、民俗学等の広い分野にわたる業績を残していること。<sup>(注)</sup>特に「ドイツ語辞典」編纂の完成までの百年にわたるいきさつ等、感動させられることが多いのです。

又、高橋氏の筆に最も力のこもる、ナポレオンのドイツ侵略、ゲッティンゲン大学七教授追放事件等、激動の時代の中につて、象牙の塔のみに閉じ込もることなく、勇敢に生き抜いたグリム兄弟の生きる姿勢には、現代に生きる私達にも多くの示唆を与えてくれます。

私は、この「グリム兄弟」の伝記の感動から、自分自身の足で、グリム兄弟の足跡を確かめたい思いにかられ、グリム兄弟の原風景を求めて、グリム縁の地ハーナウ、シュタイナウ、カッセル、マールブルク、ゲッティンゲン、パリ、ベルリンと、娘を連れて、グリム旅行<sup>(ライゼ)</sup>を始めました。

ドイツは、比較的、昔のままの姿を残す国ですが、戦災で破壊されてしまった所も多くあります。

そんな時、ルートヴィヒ・グリムの氣どらない何枚かの絵が、旅先で、私を暖く迎えてくれ、グリム兄弟の魂の故郷を、私に、そつと、垣間見せてくれました。ハーナウの城で見た、グリム兄弟を思わせる「蝶の採集をし

(注)「現代に生きるグリム」谷口、村上、風間、河合、小沢、Hレレケ著、岩波書店、一九八五年

## 緑蔭図書紹介

ている少年」の油絵。マールブルク大学の博物館の「ヘンゼン地方の民族衣装を着た娘」カッセルのグリム博物館でみた、グリム童話

第二版の「フィーメニンの肖像画」等……

ルートヴィヒのグリム童話につけたさし絵の原画と、その為の何枚かの習作も、そのひとつです。

昨年の渡独の際は、グリム兄弟生誕二百年記念の催物が行われていました。

マールブルク大学の図書館では「グリム兄弟とザヴィーニ展」が開かれており、ヤーコ

ブ・グリム手書きの一八〇八年版の Rum-penstünzchen の原稿を目交することができました。

六月十四日には、シュタイナー学校の講堂で「グリム兄弟が集めた民謡のタベ」が開かれ、ヘッセンの民族衣装を着た男女と華やぎの時を過しました。

グリム兄弟は、グリム童話と同じように、生誕二百年後の今でも、ドイツの人々の心に生き続けているのです。

この拙い文が、あなたの手元に届く、八月にも、私は、高く澄みきった青空から吹き渡る、涼やかな風が、軒につるした七夕人形を、揺らせている傍で、ヘッセンの風や雲や花が織り込まれ、ぼろぼろになりそうなグリム童話を、娘達に読んでやっていることでしょう。

なにしろ、グリム童話は、グリム兄弟の原風景と重なり合って、私の心の中に、小さな若葉にたまつた、ひと雫の露が、今、朝焼けの最初の光をあびて輝いているように、きらきらと輝き始めたばかりですから。

## シンガポールを訪れて

小澤 誉子

クトもあつたようだが、今は一種の落ち着きを持ち、それぞれの人種が生き生きと活動しているようである。

初夏の日ざしが街を包み始めた頃。私は雑誌の仕事でシンガポールを訪れた。昔から、海運の重要な拠点として発達したこの地は、今もなお、イギリス植民地時代の名ごりをとどめながらも、中国・マレー文化の色彩を放ち、新しい都市の様相を示している。

街のいたる所に、古さと新しさ、西洋と東洋の渾然としたありさまを見ることができる。そこに住む人々も、また様々であり、中國、マレー、インド、アラブを中心とした人種形成である。かつては、人種間のコンフリ

人種の多さに比例して、また言語の数も多い。そのため、人種間のコミュニケーション及びシンガポールの国際化のために、共通語として英語が用いられている。学校でも英語を勉強させられる。日本も英語は第二外国語として、義務教育及び学校で少なくとも六年間は学ぶことになっているが、日常生活との関連性の薄さから、それだけで十分通じさせることは困難である。しかし、シンガポールでは、即、生活に結びつく。資源を全く持たないシンガポールにとって、貿易という品物を流通させることができ、生きる手段であり、そのために英語は、欠くことのできない生きる手だてである。そんな国シンガポール。

私は、四年ぶりに、今はシンガポールに住

んでいる友人を訪れた。友人は中国系であり、彼女の夫は、オーストラリア人である。

現在友人は、彼女の母と娘、合わせて四人家族。娘ニッキーに、私が初めて会ったのは、

彼女がようやくヨコヨチ歩きを始めた頃だった。五歳になったニッキーは、女の子らしさが増し、父親ゆずりの白い肌と深い瞳。そして母親ゆずりの黒い髪を持つかわいらしい少女となっていた。

ニッキーは、家でおばあちゃんとすごすことが多いためか、英語より北京語がよくわかった。父親のテリーにしては、そこが少々淋しいところだろうが、学校に通い出せば、英語を話さなくてはいけなくなる。

「それまで、待つき」と、テリーはいう。

「北京語と英語をしつかりマスターすれば、きっと将来役に立つと思うの」

と、友人サンディーはいう。

国際的な街、シンガポール。街にはさまざまの肌の人々が行きかう。子どもの頃から、何の異和感もなく、さまざまな文化を受け入れる基礎が自然とでき上がることだろう。

「でも、シンガポールには大学がひとつしかないから、入学するのはとても大変。子どもは勉強のしすぎて、みんなメガネかけてるなんて冗談も出るくらいよ。子どもの数も、せいぜい二人ぐらいだから、親は、大変教育熱心なの」

のんびりとした赤道の国シンガポール。緑の多い街で遊ぶことなく机にむかうのは、なんとも、もつたない気がしてくる。

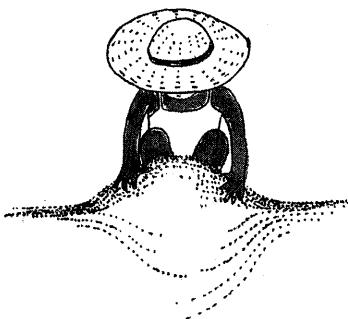
若いお母さんたちへ

おしゃべりに耳をかたむけて

はるにれの会

宮里 暁美

このコーナーに年一回書く機会をいただいて今年で三回目。我が息子も三才になった。第一回は、いい気分・幸せな気分と題し息子のしぐさの中にみられる気分を探り、思うことをつづってみた。第二回は、我が家朝といふことで父と息子の織りなす様々な朝を紹介した。今、ふと歩みを止めふり返つてみると。一才の息子と共にいて味わつたこと、二才の息子といて味わつたこと、それら一つ一つのなんとかかけがえのないことか。「成長」という言葉の本当の意味に今ようやく出会つたのではな



いだらうか。つまり成長とは、「進む」ということでは

飲む。

なく「ひろがる」ということであり、はじまりに現われ

たものが一生を通して意味を持つ：そういうことが言えるのではないだらうか。なんとなく、そんな深遠な気持ちに包まれつつ、今回も息子の今をとらえてみたいと思う。今回のテーマは——ことば一。

——あつたかい・あつい——

お風呂は好きなんだけど頭からジャーがいやなK。今夜もお風呂に入ろうかと言うと、「お風呂あついの」と不機嫌そうに言う。時間もおそくなりお風呂は取りやめ。ところが寝る時になつて（母のふとんにもぐりこみつつ）「おふろはいる！」と言う。「明日入ろうね」と言うと「おふろはいる。おふろあつたか～い」と言う。

——二才三ヶ月——

Kにとって「あつい」は自分に害を加えるものであり、「あつたかい」は自分を包み保護するイメージがある。何気なく口に入れたみそ汁があつかった時の驚きと痛み、今度はどうかな、とおそるおそるおそる口をつけてみて大丈夫あつたかい、とわかつた時の笑顔。文字通り体験を通して言葉を味わつていったK。寝る前になつておふろのことを思い出し、入つてもいいな、と思つたKは「おふろあつたか～い」と言う。うつとりとした口調でそう言う。「あつい」といつて拒否したものを、「あつたかい」と言って受け容れる。そこにKの思いがある。「あつたかい」に込められた思いがある。

「あつい」は大人のものであり「あつたかい」は自分のものだと考へているK。同じように「からい」も大人のものとしている。そして時に「もう大きいから」とか「大きくなつたら」と言つて「あつい」や「からい」を味わつてみようとし、口をゆがめ、やっぱりちがうといつたかいんだよ。」そういうつてスープをおいしそうに

——三才一ヶ月——

食事の時、スープの皿をさわりながら、「パパとママのはあついんでしょ」父「そうだよ」「けいごのはね、あつたかいんだよ。」そういうつてスープをおいしそうに

う顔をする。そうやつて又何かを心の中にためこんでいる。

——ねねね・それは——

保育園の保護者会からの帰り道、急にKの言葉（言い方）が一つ増えたことに気づく。それは、……ねねねーと、ねねねで言葉をつなぐようになったこと。「ごろごろのね、ねねねのどのね、ねねね、おくのね……」という様に、夜寝る前にも「むかしね、ねねねあるところね、ねねね、三びきのね……」と話してくれる。

——二才三ヶ月——

朝、気分良く起きてきておしゃべりを楽しむ。「おじさんがね、こうえんでね、おとこのこをぶったのね、それはわるいね——」

——三才三ヶ月——

はじめて「ねねね」に出会った時、私はまるで知らない誰かをみるようにKをまじまじとみつめてしまった。何かが確実に変わったのだ。「ママ！」と呼び「牛乳ち

ようだい」と言い、「いらっしゃめ」と泣き、そうやつて自分の欲求や気持ちを表わすものとして身につけていった言葉の世界に、新しく一つ、「語る」という世界が加わったということなのだろうか。

そうやつてKは次々に新しい何かを身につけていく。一年後、Kはもうすっかりおしゃべりが板についている。そして思いがけない言い回しをして大人を笑わせたり驚かしたりする。「それはわるいねー」と言うK。どこで覚えたのか、どのように理解して使っているのか、それは解らないけども、心の内にはもつといろいろなK自身の解釈が過巻いているのかもしれない。それが時折、潮が満ちるようにして外にこぼれ出す、新しい言葉や言い回しとして。そのために時があり、その面白い時を味わいそこねないために、そばにいる大人は、心をゆったりさせていたいものだと、しみじみ思う。

——そのとき！——

なしを食べながら、一口食べては「そのときわとり

がいました。ガブリ。そのときわんわんがいました。ガブッ。そのとき！ グワーングワーンしていました。それはおおかみでした。ガブガブ……。」

### —二才九ヶ月—

なしを食べながら、「そのとき！」と決然として言うK。ガブリとかみつく度に確実に姿を変えるなしに、Kは犬や狼を見る。そして又、ガブリとかみつく。確実に変わっていくなしを見つめつつ、Kはさつきとは違う今を味わう。ほんの一秒後であつたとしても、それは全く違う「そのとき」なのだ。経過していく「時」そのものをKは味わい遊んでいる。「時」を遊ぶようになつたK。

「昨日」という言葉が「過去」全てを包んでいたころ、電話で田舎の祖母と話している時に、「きのうおまつりに行つたねー」というKの言葉に、祖母が「きのうじやないでしょ」と何気なく答えると、ひっくり返つて泣いた。同様に「未来」は「明日」であったKが、「今度デ

イズニーランド行こうか」と言うようになる。「明日」の他に「今度」が、「昨日」の他に「前」がKの中に出現する。それがいつのことだったのか、残念ながら私は記録していないけれども、「時」のイメージはこうして確実に、Kの中でひろがりをみせていく。

「そのとき」遊び。あなたもやつてみませんか？

——けいごみてな・どしたの？ ってきいてあげる・けいごだっこしてたから？——

夜TVをみていると、これが「お母さんが死んじやつた子の話」私はこういうのに弱い。涙がボロボロこぼれる。するとKはびっくりした顔で私をみつめ「どしたの？」  
「こわくないよ。」それでも泣きやまないので、「けいごみてな」と励ますように言う。それがまたいじらしくて泣けてしまう。TVの向こう側とこちら側で両方ドラマをやっているよう。結局、Kが氣の毒がつて、「TVパチンしよう」これで一件落着。

### —二才八ヶ月—

新聞に「ビートたけし」の事件が載っている。読みながら思わず「たけしかわいそー」とつぶやくと、他のことをしていたKが、ガバッと振りむき「たけしくん、どうしたの?」「けいご、どしたの?って言つてあげる」と言う。「けいごやさしいねー」としみじみ言うと気を良し、さらに「ここ(とひざこぞうを指さす)ころんだの? けいご、薬かってきてあげるよ!」

—二才十一ヶ月—

保育園からの帰り、久しぶりにダッコで家まで帰る。暑くて暑くて汗だらけ。「おかあさん暑いから、とにかくシャワーをあびてくるわ」と言うと、ちょっと考えていたK。ぽつりと「けいごだっこしてたから」と言う。

—二才七ヶ月—

子どもは、このようにして大人を写しとる。自分が得たものを人に与える。自分の経験した範囲でしか物事が考えられない、という言い方も成り立つかもしれないけれど、私には、「幼なさ」というより「本質」ではないかと思えて仕方がない。

私の職場(幼稚園)で、今春、園長先生が他園に移られた。4月の半ばころ、離任式が行なわれた。クラスの子ども達(年長組)に、「明日、前の園長先生がみんなに会いにきてくださるのよ」と話すと、真剣に話をきいていたB君が言った。

「そうだよ、園長先生、何にも言わないで行っちゃったんだもの。行ってきますも言わないで」

TVをみながら泣いている私がKには不思議で仕方がある。

ない。何故なら、Kが泣くのは怖い物が出てきた時なのに、TVの画面には一つもそんな物は写っていない。おかしいなーと思いつつ、Kは私を励ます。自分がいつもしてもらっているのと同じ方法で。「けいごみてな」と言つた時のKのまなざしには、たのもしさとやさしさがあふれていた。

私のどんな説明も必要のないB君の一言だった。子どもというのは、いつでも自分に深くかかわっている部分で物事をしつかりとらえている。

少し考えて「けいごだっこしてたから」とつぶやいたK。同じ「考えて」言つたのでもこれは前の二つとはちがう意味をもつていて。ふーふー言いつつ、それでも久しぶりの求めに応じ気前よく家までダッコした母親との道のりと、家にたどり着いた母親の一言から、Kは考える。そして言う。「けいご、だっこしてたから」と。ただそれだけのことだけれど、私は妙に満ち足りた。Kの心の中を、何かが行つたり来たりしたような気がして、私は妙にやさしくなった。

不思議なことだと思う。何も期待していない時に、子どもはひょいとつぶやく。それがどんな意味を持つているのかはわからないけれど、心に残る一言をつぶやく。

おふろからあがり気嫌よく一緒に入浴した人形を並べて遊ぶ。畳のへりに一直線に並べて遊ぶ。母親があきている。そこへ父親が帰つて来る。（以下、父親が記す。）

母と父が話していると急に手を伸ばし「エーエー」とやりだす。「エーエー、エーエー」起きあがって「エーエー、エー」。すぐに赤ちゃんの真似だなと思うが、それにしてはいつもと様子が違う。

「どうしたのけいご」

「エーエー」

エーエーと言いながら、それだけで何かを表現しようとしているようだ。

「なんなの?」「エーエー」「赤ちゃんなの?」「エーエー」

どうやら赤ちゃんのようなのだが、いつもの「赤ちゃん」は大人との関係によつて全て反応するが、今の「赤ちゃん」はそれだけでなく、頭の中にある一つのイメージを自分で表現しているようで、こちらがわからない所がずいぶんある。

——エーエー、エーエーりょうたろう君になつたK——

「エーエ、エーエ」「赤ちゃんなの？けいこ」「誰なの？」

何度か聞くと、急に「りょうたろうだよ」と言う。

「ええっ。りょうたろうなの？」

「けいこ、りょうたろうやつてんだよ。」

「何組なの？」

どうやら、保育園の0才か1才クラスのりょうたろう君の何かを表現しているらしいことがわかった。

これは、Kにとって歴史的なことだ。「赤ちゃん」という役割ではなく、「りょうたろうくん」という具体的な人をこんなにも演じることは、はじめてだ。

その後も「エーエ」と言いながら起きだしてイスにのぼり壁にうつった光を指さし「エーエ、エーエ」「りょうたろう君、はやく寝なさい」と言うと「エエエ！」いやだと言つたつもりなのだろう。(「エエ語」がよくわかるようになった。)

やがて、りょうたろう君になつたKは、りょうたろう君のままで、ゆっくり寝ついた。  
——二才八ヶ月——

「エーエ」というつぶやきを、私は何気なく聞き流していただけれど、途中で帰ってきた父親は、Kの姿に何かいつもと違うものを感じとつた。そして、その謎を追求していく時に見い出したのが「りょうたろうだよ」という答だつた。

私は、次第に眠氣もさめていった。確かにKは、『頭の中にある一つのイメージを表現していた』のだ。

「エーエ」というつぶやきは、ただそのままに受け取れば何でもないつぶやきだろう。いつもの赤ちゃんの真似として理解されるだけかもしれない。ところが、この時の父親のように、感じとる心があると、それは全く違うものとなる。Kのしていることが次第に明確になり、Kのしているつもりのこと(意志)が明らかになる。「そ

うなんだね」と親がはつきりわかつた時、Kは、通じた喜びを感じたにちがいない。とても大切なことを、私は父と子の会話から学んだように思う。

夜、「カメラをかして」と言い出す。おじいちゃんが「このカメラはけいごにあげよう」と言つたのを覚えている。でもカメラはおもぢやじやないんだから、と父に言われる。「もう少し大きくなないとだめなんだよ」で大泣きする。しばらくして夕食を作つてゐる私のところへ来て「けいごもう大きいよねー」と訴える。「おにいちゃんだもん、大きいよねー」と。そこで窮屈の策。

「けいごはもう大きいんだけどね、カメラを使うのは、ひげがはえるくらい大きくないとダメなのよ。」それに答えて「けいごひげある。」そしてほっぺをさわる。それから少々気分が変わり、「パパはバツ！」どうやら父親を悪者にして気をおさめたらしい。

——二才十一ヶ月——

三才が近づいてきたころから、Kの「大きいんだよ」がよくきかれるようになつた。Kはこの言葉を力の拡大として使つてゐる。「もう大きいんだもん」と言えば、摩法の呪文のようにして、どんな秘密の扉も開くにちが

いないと思つてゐる。だから、それが否定されるとKは怒る。こんなに大きいのに、と思うから。

もうすぐ兄になるK。小さなキュー・ピー人形をズボンの中に入れ「あかちゃんおなかの中なの」と言う。ある時、その小さな小さな人形とおしゃべりしてゐたK。「いいかい、どっちが大きいかなー」

Kは人形を床に置き、むかい合つて真面目な顔をして背比べをはじめた。5センチにも足りない人形と背比べをし、そして安心したように「ほらね、おにいちゃんの方が大きいね」と言う。

夏には兄になるK。きっと又、とびきりの一年が私達を待つてゐるのだろう。一年後にどんな報告ができるか、今から楽しみです。

ちょっと古い話になりますが、今年四

月の統一地方選挙では、多くの女性候補者が出馬し、話題を集めました。それら女性候補者のほとんどが「普通の主婦」で彼女たちのご主人やお子さんたちとの関係もニュースになりました。

やはり多くの女性候補者を出したある団体で、選挙後、本をつくろう、という話がでました。というのも、日本には子供が読めるような政治家の本がないのです。アメリカだったらば、子供達は小さなところからワシントンやリンカーンの話に親しみ、政治は身近なものとなります。ところが日本ではせいぜい田中角栄の話ぐらい。手本にはなりません。

選挙は大変な事業です。子供たちにもかなりソワよせがいきます。だからこそ立候補した主婦やその手伝いをした主婦たちは、きっと選挙の前には「お母さんたちは、この理由で選挙をする」と何か子供たちを納得させた論理をもつていています。

想とは違っていました。つまり、母親は子供を納得させてはいなかつた、というのが明らかになってきたのです。唯一納得させた論理というのが「4月○日まで

がまんしなさい」という、およそそまつなものでした。だから、子供たちは選挙とは何なのか、母親がどうして家にいるのか、全く理解していなかつた、というものが子供たちへのヒアリング調査からよくわかりました。

世間を変えよう、とか言っておきながら、自分の子どもを納得させていかつた、というのはちょっととしたショックでした。とはいって、皆元気印の女性たち。「まずは、自分の家からはじめなきや」と氣をとりなおして、また張りきりだし

## 幼児の教育 第八十六巻 第八号

八月号 ◎

定価 四〇〇円

昭和六十二年七月二十五日 印刷  
昭和六十二年八月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼  
発行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発行所 日本幼稚園協会

印刷所 図書印刷株式会社  
東京都千代田区神田小川町三ノ一

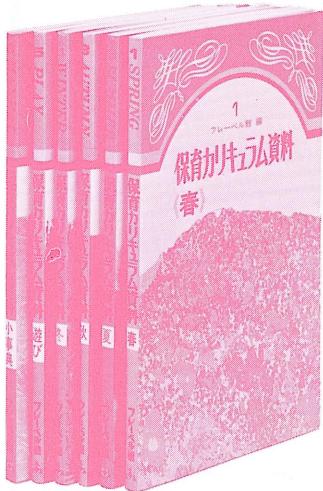
発売所 株式会社 フレーベル館  
振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

# 保育カリキュラム資料(全6巻)

(春・夏・秋・冬・遊び・小事典)



別冊付録付・総索引付

カリキュラム作成のとき役立ちます。

既製のカリキュラムでは、あきたらないと考えているあなたに好適です。

本当の子どものためのカリキュラムとは、あなた自身がつくったものです。小事典には別冊、「総索引」が付録されています。

フレーベル館・著

B5判・136頁・定価800円  
5・遊びのみ 定価1,200円

1  
春



3  
秋



9月の保育・10月の保育・  
11月の保育・運動会

2  
夏



4  
冬



12月の保育・1月の保育・2月の  
保育・3月の保育・進学の準備

5  
遊び



あぶくたつにえたつた・石けり。  
うずまき鬼・絵かき歌遊び・大きなクリ  
の木の下で・開戦ドン・他

6  
小事典



付録・別冊「総索引」

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館

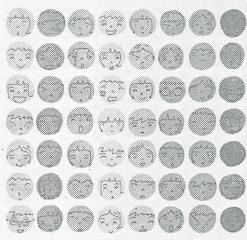
# よりよい保育の条件

保育観・幼児理解・  
クラス規模・保育  
方法 等

## よりよい保育の条件

保育観・幼児理解・クラス規模・保育方法 等

日本保育学会 編著



たくさんの事例と実態調査をもとに、  
子どもにとってもっともよい保育の条件づくりをさぐります。

- ①子ども観・保育観、幼児理解の深さ、子どもの実態と保育計画のズレなどについて
- ②保育者のチームワーク、園舎・園庭、地域性など、保育空間の問題について
- ③クラス規模について

日本保育学会 編著 B5判・224頁・定価1,800円

絵で見てすぐに教えられる  
切り紙指導の入門書  
保育が楽しくなる

## 四季の切り紙



安達佑子著

やさしい切り紙の入門書。身近な四季折り折りの草花や動物などを多数収録。折り方の名称、切り紙の歴史、指導の手引なども併記。

B5判・128頁・定価1,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館